

〔翻 訳〕

コンラート・ツェルティスのジクストゥス・トゥヒャー宛書簡(1492年晩秋)

Translation: Konrad Celtis' Letter to Sixtus Tucher, late autumn 1492

田 中 圭 子

Tanaka Keiko

はじめに

本稿では、1500年前後の神聖ローマ帝国で活動し、人文主義的関心を共有する友人同士であった詩人コンラート・ツェルティス（1459～1508）と法学者ジクストゥス・トゥヒャー（1459～1507）が交わした往復書簡¹の中から、ツェルティスが1492年に書いたと考えられている1通（書簡46）²の翻訳を試みる。1491/92年にツェルティスがトゥヒャーに宛てた2通（書簡20、23）について、すでに訳出を行ったが³、それらに続く内容のものである。

この書簡を理解するための背景として、1492年にツェルティスがおかれていた状況について、簡単に触れておきたい。この年の夏学期に、ツェルティスはインゴルシュタット大学で詩学・修辞学の講義を担当したが⁴、雇用期間の延長、待遇の改善を求めて、同大学の正教授の地位にあった友人トゥヒャーの助力を期待していた⁵。これに対して、トゥヒャーはこの件に関する決定権は自分にはないと知らせ、大学創立者であるバイエルン公に対する学生請願という手段を勧めている⁶。だがツェルティスはこの提案を受け入れず、秋頃には他都市に旅行し、長期にわたって大学を不在にしていた⁷。また、インゴルシュタット大学では、ヨハネス・リートナーという人物が1484年から詩学・修辞学の授業を担当しており⁸、そのポストをめぐる彼とツェルティス是对立関係にあったようである。

本稿で取り上げる書簡46は、1492年晩秋に書かれたとみなされているが、その中では、大学での雇用延長は困難であろう、との見通しのもとに、トゥヒャーからの再度の学生請願の勧めを退け、インゴルシュタットを去るつもりであること、リートナーに関する風刺詩をトゥヒャーに送ることなどが綴られている。

書簡作成の方法論、就中ツェルティス自身が1492年に刊行した書簡作成の手引書に示された理論⁹と実際の書簡を比較する観点からは、書簡46において、形式における相違と叙述内容における近似を見出すことができる。

まず形式面においては、書簡冒頭に置かれるべき「挨拶」「序言」が省かれ、いきなり「用件」から始まっていること、「結尾句」として結びの挨拶（決まり文句である「お元気で（Vale.）」）と差出人名はあるが、発信地と日付は記載されていないこと、といった規範からの逸脱がみられる。これら要素の省略は、トゥヒャー宛ての書簡では珍しくはな

く、親しさの表れであるとともに、「用件」がそれだけ切迫したものであったことを示しているとも考えられる。

ツェルティス自身は、この時点でもインゴルシュタット大学での仕事を諦めておらず¹⁰、トゥヒャーへの信頼を示しつつ、彼の共感と助力を引き続き得られるよう、意を用いた叙述を行なっている。例えば、ツェルティスの待遇問題に関しては、つねに「私たち」の問題として述べ、立場と利害の共有を示している。また、書簡前半で自らの境遇に対する思いを強い言葉で述べた後、後半ではやや調子を和らげて、「かつて私たちの閑暇に楽しんだ」リートナーに関する風刺詩を送る、と記し、敵対者たちへの感情と過去の楽しかった記憶を想起させうえて、送付した詩に関する判断をトゥヒャーに委ねることで、彼への信頼を表明している。ツェルティスによる書簡作成の手引書では、「励まし」の書簡の書き方として、まずは相手に愛情や信頼を確認させることから始めるよう述べられているが¹¹、「励まし」を、自らが望む行動を相手に促すことと捉えれば、書簡46はその実践例であるとみなすことが可能であろう。さらに、この手引書では、促しが実現しなかった場合に起こるデメリット、実現した場合のメリットを示すよう指南されており¹²、文芸活動を通じて大学に貢献しうるツェルティスがインゴルシュタットを去る、という予告は、前者にあてはまると考えられる¹³。つまり、この書簡における叙述の内容は、書簡作成の方法論を活用し、相手に望ましい行動を取らせるための戦略的な表現を行なった実例と捉えられるのである。

翻 訳

書簡46

(1492年 晩秋)

あなたの助言では、私たちのために、あらためて学生たちによる請願がなされるべきであり、またその一方で、不面目と私たちの敵手の嘲笑に対する私の考えを表明するように、とのことですが、(次に述べる事柄について) 少々ご理解ください。もし、バイエルンの君主の栄光、名声、栄誉のうちに彼のインゴルシュタットの学園において与えられた私たちへの恩恵が、あなたがたの公共の利益にとって良きことを配慮すべき皆さまのいるところで私を支えられないのなら、私はこれに耐えられません。私たちの給金は、あなたがたの判断と、各々聴講生を抱えているふたりの医者¹⁴、あなたがたが詩人かつ雄弁家と呼んでいる、無学で粗野な人によってつぶされてしまうでしょう。そのことが私を動揺させるはずがありませんし、私はあらゆる悪意をたやすく同情とし、どれほど厳しい冬が襲おうとも、立ち向かうことができます。すでに希望をかけて欺かれてしまいましたが、私はあなたがたの町よりも大きな世界を知っております。あなたがたに対する私の信頼が、どれほど異なる結論を求めていたとしても、そして、長い不在によって私が得をしたとしても、もっとよく熟慮されたことが行われていたならば、(と思います)。けれども、ここから別のことを。かつて私たちの閑暇に楽しんだ、老いた男¹⁵についての短い詩のようなものをあなたに送ります¹⁶。彼には不快な思いをさせられたと、あなたはおっしゃっていますから。私たちが憤るほどのこともないと思われる愚かな人物が私に向けた戯言より

も、さらに私を悩ませたのは、他者からの不当な扱いでした。しかし、不死の神々のおかげで、私たちはどうやらこうしたことを防いだようですし、その恵み深さは、（あの）怠惰な人が、あなたがたのもとで、詩句をもっと礼儀にかなったものにし、（他者を）傷つけないような人物であろうとした（ように思われた）ほどです。もし、あなたがそれをあまりに厳しいとお考えなら、控えておくべきことを助言によってお示しくださいますよう、お願いいたします。例えば、あなたもご存知のように、死んだものは生きているものよりも念入りに研磨されるものです。この学園の勢力ある人々や夢想家たちが、やすり（のような風刺）を求めておらず、公共の場に出る以上に、意味のない機知をおそれるのでなければ、彼らに向けて別のものを送っていたでしょう。彼らに攻撃され、私は大学に別れを告げました。今こうして立ち去りながら、ご挨拶申し上げたいと思います。ですが、これら（の詩）は、友のところに黙って質入れしておくことにいたしましょう。お元気で。私は明日ニュルンベルクへまいります。その後、戻ってきたいと望んでいます。あなたの

コンラート・ツェルティスより¹⁷。

[付記] 本研究は、JSPS科研費JP18K00107の助成を受けたものである。

注釈

¹ 1491～1495年の間にラテン語で書かれた26通が、自筆書簡または写しの形で残されている。それらの伝来状況や特徴については、拙稿「ルネサンス期ドイツの知識人による書簡作成の理論と実践～コンラート・ツェルティス、ジクストゥス・トゥヒャー往復書簡より～」、『社会文化史学』64号、2021年、1～16頁。ツェルティスとトゥヒャーの往復書簡は、ルップリヒの編纂により1934年に公開されたツェルティス書簡集に収録されている。Hans Rupprich (hrsg. v.), *Der Briefwechsel des Konrad Celtis*, München, 1934.

² 本稿で用いている書簡番号は、注1に示した、ルップリヒ編ツェルティス書簡集に基づく。発信地と日付の記載を欠く書簡については、ルップリヒの推定に従って、執筆時期と場所を示している。

³ 拙稿「コンラート・ツェルティスのジクストゥス・トゥヒャー宛書簡（1491/92年）」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』59巻、2021年、71～74頁（以後、「書簡（1491/92年）」と略記する）。

⁴ この講義に先立ち、ツェルティスは1491年から「開講演説」の準備に取り組んでいた。その事情を伝える書簡は、Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.20, S.35. 拙訳は、「書簡（1491/92年）」、72頁。

⁵ 1492年3月頃のトゥヒャー宛書簡において、ツェルティスは「正規の講義と次の1年に対する100ライングルデンの給与」を望む、と記している。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.23, S.40f. 拙訳は、「書簡（1491/92年）」、72～73頁。しかし、同年5月頃に、雇用期間は半年、給与は40ないし42グルデンと決まり、ツェルティスは大きな不満を抱くこととなった。

⁶ Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.24, S.41f.

⁷ 1492年8月31日から9月21日の間に書かれたと推測されているトゥヒャー宛書簡にて、ツェルティスはレーゲンスブルク到着を報告し、その後リンツ、ヴィーンに向かうことを予告している。*Ibid.*, Nr.39, S.65f. 講義期間中の不在は、大学内で問題視されたようであり、ツェルティスはトゥヒャー宛

の書簡で、夏学期中に休んだ分の補講を約束している。*Ibid.*, Nr.44, S.74.

⁸ ヨハネス・リートナーは教会法博士であったが、人文主義的な素養も持ち合わせていた。F. J. Worstbrock, „Riedner, Johannes“, in: Laetitia Boehm / Wilfried Müller / Wolfgang J. Smolka / Helmut Zedelmaier (hrsg. v.), *Biographisches Lexikon der Ludwig-Maximilians-Universität München, Teil 1, Ingolstadt-Landshut 1472-1826*, Berlin, 1998 S.343; Maximilian Schuh, *Aneignungen des Humanismus. Institutionelle und individuelle Praktiken an der Universität Ingolstadt im 15. Jahrhundert*, Leiden – Boston, 2013, S.73-78.

⁹ ツェルティスが刊行した書簡作成の手引書は、ルップリヒが編纂した往復書簡集に収録されている。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.638-648. この手引書の内容については、拙稿「コンラート・ツェルティスの書簡作成術」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』56巻、2019年、291～302頁。

¹⁰ 一時インゴルシュタットを離れたツェルティスは、1493年にはレーゲンスブルクの大聖堂付属学校で働いていた。リートナーが大学を去った後、1494年5月に、ツェルティスは念願のインゴルシュタット大学正教授に就任した。

¹¹ 「それでは、励まし（の書簡）について説明しよう。自分たちや他の人ではなく、われわれが書き送っている相手の愛情、信頼、好意や親しさにおいて、それを求めていることを示す。」Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.358, S.644.

¹² 「励まし」の書簡に関する説明の続きとして、「次いで、われわれが促している、もしくは思いとどまらせようとしていることが行われなかった場合に、起こりうる不都合なこと（を示す）。さらに、（励ましに）従ったならば何が起きるか（を示し）、それを例示によって強めること。」*Ibid.*

¹³ ツェルティスの要望が実現しなかった場合、大学の他の人物に関する風刺詩を公表する、という含意を読み取りうることも考えられている。Ursula Hess, „Typen des Humanistenbriefs. Zu den Celtis-Autographen der Münchner Universitätsbibliothek“, in: Klaus Grubmüller (hrsg. v.), *Befund und Deutung. Zum Verhältnis von Empirie und Interpretation in Sprach- und Literaturwissenschaft*, Tübingen, 1979, S.479.

¹⁴ インゴルシュタット大学で人文主義的な詩学の講義が開設されたのは1477年のことであり、最初の授業担当者は医学部正教授エアハルト・ヴィンツベルガー、その後任がリートナーであったため、医学部の中にリートナー支持者がいたのかもしれない。Schuh, *op.cit.*, S.65-82.

¹⁵ リートナーを指す。ツェルティスとトゥヒャーの往復書簡では、リートナーの名前は出さずに叙述が行われており、「老いた男 (vetulus)」という表現は、他の書簡でも用いられている。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.53, S.87.

¹⁶ 1513年刊行の『頌歌』に収録された、老いた詩人に向けられた二つの詩を指す、と考えられている。Antonia Landois, „Zwei unbekannte Celtis-Autographen aus dem Tucherischen Familienarchiv“, in: *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, Bd.97, 2010, S.119.

¹⁷ ルップリヒのトランスクリプションに基づき翻訳を行なった。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.46, S.76f. ミュンヘン大学図書館所蔵の自筆書簡は、München, Universitätsbibliothek, 4^o Cod. Ms.782 (Cim.27), Nr.10. PDF版は、<https://epub.ub.uni-muenchen.de/11365/> (2022年12月10日最終閲覧)。